

御嶽大神

代表役員宮司 須崎直衛

御嶽大神と仰がれる当社には、三柱の神さまが祀られております。主祭神を櫛真智命・相殿の神を大己貴命、少彦名命と申し上げます。櫛真智命は、また大麻止乃豆乃天神とも申し、神皇産靈尊のみ子といわれ、本来ト事を掌り給うた神であります。延喜式神名帳（九〇五一九二七）大和国十市郡の条に、天香具山坐櫛真智神社とあり、大。月次・新嘗。元名は大麻等乃知神と注記されております。奈良盆地の一角に鼎立する、大和三山の一つ天香具山の麓に鎮座する、天香具山神社のご祭神とご一休の神で、神社として他にあまり祀られていないので、あるいは大変馴染の薄いご神名かもしれません。

なお神名帳に、左京二条に坐す神として、太詔戸命神・久慈真智命神とも見え、祈年祭式には、この二神を卜庭の神として、太兆のト事が行なわれました。ただ太兆のト事だけでなく、一条天皇の正暦五年（九九四）には、中臣氏人を宣命使として、幣帛を奉り、疾疫・火災の変、盗難の災いをこの香久山の大神に祈らせ給うたことが、国史に見えております。

クシは不思議な、或いは靈妙な意味の形容の語であり、マは真実・純粹を表わすほめ言葉の接頭語で、チに意味があるとおもわれます。「まことに靈妙な智の神さま」と解されるのであります。

櫛真智命は古くは大麻止乃豆乃天神として御嶽山の地主の神と仰がれてまいりました。命に因む神事として、一月三日鹿の肩胛骨を灼いて、その年の農作物の豊凶を占う太古祭が、今もなお齋行されております。

相殿の神大己貴命は、素戔鳴尊のみ子とも五世の孫とも伝えられ、

出雲大社のご祭神、大國主命のまたのみ名とされております。オオは美称であり、また数量の多いことを表わす接頭語で、たくさんの名を持った神、「オオナモチ」と解されます。

これに対し、少彦名命はみ名の少い神と解され、ヒコは男子をほめていう言葉で、またスクナは古く小さい意味も持つておりました。この神は神皇産靈尊のみ子とされ、母神の指の間からこぼれ落ちたといわれ、また大己貴命の掌の上に乗られたという、小さいお姿の神でありました。出雲大社には、少彦名命は祀られておりませんが、多くの神社で、大己貴命・少彦名命二神合わせてご祭神としておられるようです。大己貴命と申し上げる時、大國主命とまた違ったご神格を持たれる神とも考えられます。

大己貴命は少彦名命と力を協せ、心一つにして人間と家畜のために病気を療す処方を含め、また鳥獣や、昆虫などに噛まれたら刺されたりする災難から免れるために、禁厭の方法を定めたといわれます。二神は、山野を開発し、水陸を拓殖・開墾して、農耕・殖産に励まれました。無病・長寿・福德・円満・利用厚生等のご神徳を兼ね備えた神と申せましょう。

この三柱の神合わせて御嶽大神と称え、あるいは身近な神さまとしてみたけさまと申し上げ、遠い昔から武相二州を中心に、広く関東さらに伊豆・甲斐の人達から篤い信仰を受け、大神のご加護を多くの人達が受けて来たことは厳然たる事実であり、御嶽の神様のご神徳の然らしむる処であると考えるのであります。



入曾獅子舞講

獅子舞は奥多摩地方にも古くから各地に伝えられ、毎年秋には方々の神社で舞われてきました。娯楽の少なかつた昔、唯一の楽しみであった祭の主役をなしてきました。しかし戦後、後継者不足等により衰退した時期もありましたが近年伝統ある文化財として見直されてまいりました。

狭山市入曾の獅子舞も後継者には苦勞された時期もあつたようですが、昭和三十三年埼玉県無形文化財に指定され、氏子一同益々保存に力を盡されたときいております。

この入曾の獅子舞は毎年十月十四日、十五日に狭山市入曾の真言宗御嶽山金剛院と、入間野神社で舞われており、宝暦八年（一七五八年）に入間野神社に奉納された獅子舞の懸額が現存しているのです。今から二百三十年以上昔から伝えられ、天下泰平、五穀豊穡のために長男によって伝承され奉納されてきたと云われます。入間野神社はもと御嶽神社と称し、明治四十四年に村内の浅間神社を合祀して、今の入間野神社と改称したのでさうです。入曾獅子舞連の人達が、当御嶽神社へ参詣された最初は、昭和三十年代初頃からであつたと思ひます。毎年入間野神社の秋祭が終つたあと、十一月に三十数名の人達が御嶽神社の大前に氏子の安全と獅子舞の益々の発展を祈願され、橋本坊で直会を行つて、親睦を深めること四十年、一年も欠かすことなく続けられております。この間昭和三十九年には社頭に獅子舞を奉納され、その記念碑が随神門の下に建立されております。入曾獅子舞の更なる発展をお祈りいたす次第です。文貴 橋本